

『海はかけがえのないもの』

-虚しい会議-

東京湾三番瀬の保全と再生委員会が開催されてから、二年目を迎えた。三番瀬は東京湾の一部であり、湾全体が改善されなければ、真の三番瀬の保全と回復はありえないのを百も承知で、虚しい会議を続けている。

なぜなら、東京湾は河口湾であり、流入する河川を改善し蘇らせることが東京湾の環境を守るための抜本的対策であり、不可欠なことだからだ。三番瀬を考えると、千葉県だけが頑張っても、それは穴の空いたバケツに水を満杯にしようとするに似て、限りなく不可能に近い。

貧酸素水である青潮から三番瀬をどう守るか、千葉県は専門家を募りコンペを実施した。

そこに集結した提案は、モーターやエンジンの動力に頼るもの、耐久性のない装置に億単位の投資がかかるもの、バクテリアの助けを借りる自然志向の、一見良さそうに見えるが持続性がなく莫大なコストがかかるもの等々、いずれも資源を節約しながら有効活用し、狭い地球で人間が生きながらえるための必死さ、緊張感が微塵も感じられないものばかりだった。

グチは言いたくないが、これが日本の首都で語られ議論されている内容なのだ。情けないの一言に尽きる。

いっぽう、アメリカの首都ワシントンDCに面したチェサピーク湾では、1982年に湾をとりまくメリーランド州、ペンシルベニア州、バージニア州、ワシントンDCはもちろん、河川の分水嶺を有するニューヨーク州まで法の網を掛け、「チェサピーク湾の保全と回復計画」を定め、以来、連邦政府の援助のもとに、チェサピーク湾の改善を目的に、流入する河川の改善に取り組んでいる。

東京湾では未だに、このような動きはない。それどころか東京都では、ゴミ処理のために480ヘクタールの埋め立てを進行中だし、はたまた、羽田空港の拡張も計画している。

東京都知事は、東京湾の内で都の勝手気ままができる海域の狭さを嘆き、都自らが埋め立てに継ぐ埋め立てで江戸前の海を縮小してきたことを恥じてか、東京湾は首都圏の海で(ゴミの処理に困っている)埼玉県も権利がある等と、訳のわからないことを口走っている。

そこには、湾を保全しようなどという発想は毛頭ないようだ。チェサピーク湾やサンフランシスコ湾が実行し考えている方

向とは、まったく逆に向かっている。

-埋め立ての害と、自然のままの湾が持つ価値-

では、湾を埋め立てることがどういうことなのか、サンフランシスコに関わる人たちの考え方を以下に紹介しよう。まず、いかなる埋め立ても湾には有害である、とハッキリと言い切っている。では、埋め立てとはいかなるものなのか。1965年に制定されたカリフォルニア州法「湾を守る」法律に定義されている。

「埋め立てとは、湾におかれる土砂あるいは他のすべての物質である。これは突堤、抗、その他長時間湾内に停泊する浮揚物質をも含む」

としている。これによると、東京湾が行っているゴミの埋め立てはもちろん空港の拡張のための埋め立て、さらにはメガフロートも、湾には有害ということだ。

埋め立てには次のような害がある。

- ①埋め立ては、魚類や野生生物の居住環境を破壊する。水面、干潟、沼沢地をもつ湾は、微生物、植物、魚、水鳥、浜辺の鳥などが、自然が作り上げた微妙なバランスを保って生息し、生態系を維持している。埋め立てや浚渫といった、見たところわずかしか感じられない変化でも、遠くまで及び、しかも時にはきわめて破壊的な影響を生態系に及ぼす。
- ②埋め立てによって、水面面積および水量が縮小減量され、湾から水を流しだすために必要な潮の強さが減少する。そのため常に水質汚染の危険が増大する。
- ③埋め立てによって、湾のもつ空気調整効果は減少し、湾岸地域の大气汚染の危険が増大し、ヒート・アイランド化も進行する。

では、なぜ、アメリカではサンフランシスコ湾を守る法律が必要と考えられたのか？ それは、以下の理由から、湾がかけがえのない天然資源だと気付いたからである。

- ①サンフランシスコ湾はカリフォルニア州の最大の入江で、カナダからメキシコに至る太平洋を渡る鳥の通路となっており、何百万もの鳥たちの主要な休息場、食糧補給および越冬地となっている。沼沢地、干潟、塩田、浅瀬などをもつ入江の環境には百種近くの魚類も生息している。
- ②魚類や野生生物から人間が受ける恩恵は、食糧源、経済的恩恵、余暇利用、科学研究、教育、生活環境等が挙げられる。こうした価値は、人間が湾を縮小しないかぎり、

増加しこそすれ、減少するものではない。将来、サンフランシスコ湾は魚類や海洋植物の「農園」となり、急増する人口に対して、世界的な食糧源を増大する推計しがたい価値をもっている。

③湾の魚類や野生生物の生息環境にとってカギとなる要素は、沼沢地と干潟、湾の総水量と水面の総面積、そして良好な水の循環と、いくらかの淡水の流入である。

④サンフランシスコ湾のどの部分も、すべての魚類や他の海洋生物の存続にとって重要であると考えられる。故に生息環境が少しでも減少すれば、海洋生物も減少する結果を生む。

以上の理由でサンフランシスコ湾はかけがえのないものであることが認識され、これを良好な状態に維持増進して、次世代に引き継ごうということになった。そのために湾を守る法律が生まれた。

-食糧問題も対岸の火事か-

さて、東京湾といえば、未だにゴミ捨て場、発電所や空港を求める土地造成が進んでいる。東京湾を不動産として見ている。

世界に食糧を輸出している食糧自給率130%のアメリカが、湾は魚や海洋植物の「農園」として推計しがたい価値を持つと認識しているのに対し、食糧自給率40%の日本が海を粗末にしている。パソコンを操り、携帯電話を駆使する世代も、腹が減ってはどうにもなるまい。

こうした背景のなかで、少子化、高齢化が進行している。はたして国力を今の状態で維持できるのか。ましてや発展は望めないかもしれない。

いっばう、地球規模では人口の急増が目に見えている。併せて文明の発達には地球資源の減少を生み、中でも生物の生存に不可欠な淡水が減少し汚染されているとメディアが伝えている。このことから将来の食糧不足は確実視される。隣国北朝鮮の食糧不足は深刻と聞かすが、日本人のほとんどが、これも対岸の火事としてしか見ていないのは悲しい。

『KAZI』 No.795 2003年5月号より

-漁師の独白-

<参考資料> 三番瀬の海岸線の変遷

(赤線:現在の市界、黄線:当時の海岸線、緑線:1998年の海岸線)

